

# 社会委員会通信

No. 60

2023. 2. 5

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

1月22日(日)、フォトジャーナリスト・豊田直己さんをお招きして、『原発事故被災から12年目を迎える福島 写真取材報告～12年間続く被災の今～』という講演会を開催しました。豊田さんは、2011年3月11日の震災直後から現地入りし、現在も毎月福島で取材を重ねていらっしゃいます。年明けから今講演会の3日前まで取材をされ、最新の福島の状態を伺いました。熱くエネルギー溢れる語り口で、とても大切なお話を聞くことができました。「福島の人々が放射能の話をするのが憚られている状況」、「わからなくしてしまえばなかったことにできる」「建物を解体しても残るものがある。それは放射能」など私の心に多くの言葉が刻まれました。今まで気づけなかったこと、うすうすは気づいていても目をそむけて見てこなかったことに改めて気づかされました。貴重な機会を通信で皆様と再度共有できますことを幸いに思います。

また、今年度社会委員会は、YouTube 配信という新しい手段を取り入れて、コロナ以前と同じ質と量(回数)の講演会を開催し、例年通りに寿町、桜本教会、海員宣教協力委員会に越冬支援物資をお届けすることができました。皆様のご協力に感謝いたします。とりわけ会場参加者の人数が少ないのを直前の礼拝後のアナウンスでお伝えしたところ、礼拝後もそのままお残りくださった方がいらしたり、礼拝YouTubeをご覧になった後にわざわざ会場に足を運んでくださった方がいらしたり、写真が見やすくなるように暗幕がほしいとお伝えするとすぐにお手製の暗幕を用意して下さったり、私にとりまして、今講演会は、横浜港南台教会の底力と暖かさを改めて感じさせられるときとなりました。

教会での参加者は18名、YouTube ライブ視聴者は11名でした。3日後の25日までのYouTube再生回数は、58回です。参加者の皆様、ありがとうございました。(社会委員長：R・A)

## 原発事故から12年目を迎える福島 写真取材報告 ～12年間続く被災の今～

フォトジャーナリスト：豊田 直己

### ◆はじめに

こんにちは。今日はお招きいただきまして、ありがとうございます。なかなか福島のことについてお話しする機会とか、もう3、4年ずっと福島の写真の巡回展もやっているのですけ

れども、その開催もお話する機会も、あるいは私が作った福島についての映画(3本)の上映の機会も、どんどん減っているのが現実です。まして、去年の2月からのロシアのウクライナ侵攻によって、人々の関心はウクライナの戦争

に移っていて、ロシアが悪いと言っていると済んでしまうような世の中になっていて、それがひっくり返って、ロシアが核兵器を使うんだったら、日本も覚悟と準備をもっとしなければいけないなんていう話が、まことしやかに語られています。だから2年前の今日、核兵器禁止条約が成立したにもかかわらず、日本政府としては一切このことについては語らない。唯一の被爆国と言いながら、核兵器禁止条約に日本は残念ながら入っていません。このような流れの中で、まさに核兵器の製造の過程で、これはゆっくり燃やせば原発に使えると言って造られたのが原発であることは、皆さんもご存じだと思います。けれども、放射能が大きく地域を、あるいは地球を汚染するということについては、国会の場では語られることが非常に少なくなっています。国会の場、あるいは政府の場で語られなければ、メディアも取り上げにくいということです。

原発事故からこの3月で12年目に入りますけれども、事故の被害は続くのです。残念ながら、私たちが生きていく間には解決しません。それでも、その中で私たちは生きていかなければいけないし、その被害と向き合っていかなければいけません。そのことを、どうしたらいいのかと言う時に、私の仕事で言えば、まず事実について知られていない事実が少しでもあれば、お伝えしたい。同じ事実でも、光の当て方によって、見えてくるものも違うだろうと思い、今日はお話しさせていただこうと思っています。

## ◆最新取材報告

### ① 双葉町の「はたちを祝う会」とだるま市

福島を漢字、またはカタカナにすることについては、賛否両論あるのは知っています。福島

の人々の中にも、「漢字で書かないのはなぜ？」と言う人がいます。それは、あのヒロシマ、ナガサキを私たちが漢字で書くと、地名であったり、行政、自治体の話になったりすることと、カタカナのヒロシマ、ナガサキという言葉に含まれる核兵器の被災者、被爆地という意味との違いがあるように思います。私はカタカナで考えざるを得ません。11年前に起こった原発事故の放射能被害が、今この瞬間も、少なくとも目に見える形で出ているのは青森から静岡までですが、福島県で終わっているわけではないので、カタカナにさせていただいています。

今年の1月7日に双葉町で「はたちを祝う会」が開催されました。この日参加したのは11人。この中の1人は、お亡くなりになった友達の遺影を持っていました。双葉町には12人しか成人がいないのかと言うと、間違いです。この「はたちを祝う会」の参加対象者は58人。その中で11人が参加したということです。どうしてそんなに少ないのかと思われるでしょう。答えは簡単です。双葉町民で双葉町に住んでいるのは、12月末で17人。ただ町民以外を含めると30人ぐらいです。

そういう町なのですが、新設の庁舎がありません。17人しか町民が住んでないところに、新庁舎を建てたのです。町の職員が100名くらい働いています。町民17人に対して100名が働くとは、どういうことか分かりません。はっきりしているのは、ほとんどが町外からその新庁舎に通っているということです。町民の圧倒的多数は、例えば、いわき市には2,000人以上、埼玉県にも600人が住んでいます。町がバラバラになっているのですけれども、新庁舎ができて、去年の9月に開庁式が行われました。事故当時子どもだった人が今年20歳ですから、小学校2年生の終業式をやっている時が最後だった

わけです。「はたちを祝う会」にわざわざ当時の先生が駆けつけてくれたということで、すごく良い雰囲気でした。この子たちにとって故郷とは、建物としての学校ではなく、先生を含めた仲間とか同級生だから帰って来るのです。帰って来て、すぐ「はい、さようなら」ではないのです。2日間、それに合わせるように恒例のだるま市が行われました。300年続いているそうで、震災に関係なくずっとやっていたのですけれども、震災後は避難者がたくさん住んでいるところでやっていました。晴れ着の人もいますが、だるま市が行われると聞けば、当然子どもも来ます。2日間で3,200人の来場者があったそうです。3,200人が来て、その日に帰るのです。「子どもが来てもいいのですか？」ということも考えなければいけないのです。というのは、双葉駅前で「はたちを祝う会」をやったのですけれども、その駅の脇にある、11年前からそのままになっている駐輪場にあるモニタリングポストだけでも、 $0.261 \mu\text{Sv/h}$ の放射線が飛び交っています。事故前、おそらく横浜のこの辺りは事故後も $0.04 \mu\text{Sv/h}$ くらいだと思います。ですから、その4倍、5倍の放射線が飛び交っているところに子どもを連れて来ていいのか、という議論もあります。けれども、そんな議論がすっ飛ばすようなお祭りが行われてしまうのです。

もう1つ気になったのは、子どもたちが来るということで、廃炉で使っているようなロボットアームの実験をやったのです。誰がやったかと言うと、東京電力と資源エネルギー庁が一緒になってブースを開いたのです。今でも毎日かなりの量の汚染水をアルプスという処理装置で処理していて、今年の5月から、早ければ春には海に流そうとしています。アルプス処理装置で処理した水を流すのだからいいでしょう、

という話に聞こえます。私に言わせれば、処理できていない水です。トリチウムはそのまま残っています。ですから、汚染水だと言う人もいます。トリチウムは放射性物質ですから、体に害はあっても、良いことはありません。ただ、どのくらい害があるかは、よく分かりません。一般的には放射能は危ないけれども、「どのくらい危ないの?」と言われると、分かりません。10年前に流行った言葉がありますね。「直ちに影響がない」。 $0.261 \mu\text{Sv/h}$ ぐらいでは、直ちに影響がないことは確かだと思います。赤ちゃんでも私たちでも直ちに影響がない。直ちに影響があるのは、これを100万倍した、シーベルトのレベルです。 $100\text{Sv/h}$  浴びれば瞬間に死んでしまいますが、このくらい低いと、どのくらい悪いのかは分かりません。ヒロシマ、ナガサキの被爆者たちは、今もアメリカのモルモットのように検査を定期的に受けていますけれども、あの被爆の仕方と違うので、よく分かりません。その中で、資源エネルギー庁と東電が一緒になって、子どもたちにその処理水を流すことに理解を得てもらおうと思っていることは、覚えておいてよいのではないかと思います。

## ② 中間貯蔵施設の現在と課題



上の写真は1月に撮ったのですが、向こうに見えるのが原発、手前が中間貯蔵施設です。除染で集めた放射能汚染土です。国は除去土壌等

と言います。除去土壌等の等は木や草も入っているからと言ってはいますが、それを今、埋め立てているところです。まだ埋め立てが終わっていないということは、除染で集めた汚染土を集めて運んでいるのです。ただピーク時に比べれば、15分の1くらいに減ったらしいです。1番多い時には10tダンプが3,000台、毎日福島県内から運んでいたけれども、今は200台ぐらいだと言っていました。予定の8割ぐらいはもう集めたと言っているのですけれども、まだ終わっていません。谷を埋めていくのですが、埋めた後に草の種を蒔いて、見た目がゴルフ場のようになっていますけれども、中身は放射能汚染土ですから、「どうするの?」と聞くと、2045年には、これをまた全部開けて、福島県内の最終処分場に持って行くと言っています。でも、最終処分場はどこか、現時点では誰も知りません。なぜかと言うと、「こんなものを持って来るな」と皆が思っているからです。

### ③ 埼玉県所沢市での実証実験の可能性?!

持って来るなど言うのを持って行かせるためには、戦争時代の言葉で言えば、宣撫工作が必要です。埼玉県の所沢市と、東京で言えば新宿御苑辺りで実験すると言っています。実験を本当にするかどうかは分かりません。ただ、もう住民説明会をやったというような形で進んでいます。所沢は、私の住んでいる東村山の隣町なので、行ってみました。けれども、説明会のことは、所沢市の市報にも載りません。2つの自治会の掲示板に30枚ぐらい「やりますよ」という案内を貼って、市民のごく一部の人に知らせて行ったということです。5m×20mくらいの穴を掘って、そこに埋めてみようという実験だったのでありますが、地元の人たちはすぐ気がつきました。地元の人たちが冗談じゃない

と抗議をしている中で説明会が開催されました。だから、58名しか入れないのです。マスコミが、私を含めていっぱい来ていたのですけれども、写真を撮ると追い出されるわけです。秘密主義ですよ。ガラスの扉なので、環境省の役人がそこに立って中を見せないようにしていました。そういうところまで秘密にするのです。だから、相当悪いことをするのか、と、思っています。

埋め立てていると言いました中間貯蔵施設ですが、地面に降りていくと、地権者たちもいます。全部の家が更地になったわけではなくて、建物としての家は残っていたりするわけです。そういう人たちは、環境省、国の約束をきちんと守らせるということで、地権者の会を作っています。例えば、モノとしての仏壇はあるけれども、これは置いて行くしかない、というような形で。そういう人たちがまだいるということも知っておくとよいと思います。

### ◆原発震災12年目のフクシマ

#### ①見える風景と見えない放射能

以上が最新報告ですがけれども、今の話は双葉町だけの話ではありません。これは双葉町の2つ隣の富岡町の話です。富岡町は爆発事故を起こした福島第一原発ではなくて、東京電力福島第二原発がある町です。ですから、原発関係の仕事で潤っていたと言うか、成り立っていたような側面があるのでしょうか。去年の4月に桜祭りが開かれました。震災前から桜並木で有名なところです。学校を更地にしたところで行われ、その周辺も更地が広がっています。更地が広がっているというのは、全部が解体されたわけではなくて、残っている家もありますが、1人も住んでいません。

次頁左の写真は JR 常磐線の夜ノ森（よのも

り)です。行政としては富岡になります。それでも、1万人規模で観光客、あるいは地元の人が1日だけというか、日帰りに戻るといような形で桜祭りが行われました。手指消毒の液があつて、マスクを着けているか確認し、着けていない人には「マスクをあげますから着けてください」と言っていました。それをすると腕輪をして、チェックしましたよ、という形で、ステージもあつたり、お祭りもあるのです。パンフレットにも「新型コロナウイルスの感染につき、気をつけてください」ということは書かれていますけれども、地元の新聞、広報も、放射能の話はゼロです。このことをどう考えたらよいのでしょうか？ 福島で放射能の話が福島の人ができることが憚られるような状況が日々作られているのだらうと思っています。



最初から言われていましたが、モニタリングポストの数値は正しいのでしょうか？ 事故後、最初は皆さん持っていなかったけれども、途中から放射線測定器を買って測れるようになると、何で自分の測定値とモニタリングポストの数字が違うのか、と疑問に思い始めました。公的な発表になると、2割から3割低く表示されているのではないかという問題が残ります。機器だから誤差があるのは分かりますが、モニタリングポストの方が必ず低いのです。もう1つは、病気になった時に、モニタリングポストの数値が公的数字として記録されていくと、「そ

んなに低かつたんでしょ？」と言われてしまう。そのようなことが今後起こるだろうと心配しています。

今、福島に行くと、全く違う風景が見え始めています。これはJヴィレッジと言って、東京電力がお金を出して作ったサッカーグラウンドです。サッカーコートが11面くらいあつて、宿泊施設もあります。オリンピックの聖火リレーの出発点がここになったのですけれども、今行くと、こういう風景（下の写真）です。



子どもも全国から集まって来ます。11年前はここがあので爆発した原発事故の対策の前線本部だったことは、もう誰も知らないですね。このサッカーコートの上は、作業員の駐車場でした。今行くと、整備されたメイングラウンドがありますけれども、そこは作業員たちの宿舎になっていたわけです。そんな風景も、今は原発事故があつたことすら忘れてしまうような、あるいはなかったことにされるような風景。駐車場を見ても、普通の駐車場です。しかし、11年前に私が行った時には、自衛隊の戦車がありました。戦車は鉄の板が厚いから放射線を遮る量が多いということで、ブルドーザーの代わりに使ったのだらうと思います。しかし、それは放射能汚染ごみになってしまったわけで、ここに放置されていました。

## ②覆らない被曝と放射能汚染







思います。これ（上の写真）何だか分かりますか？ 私はあの事故で福島に行って初めて知りました。香茸（こうたけ）というきのこです。猪の鼻に似ているので、地元の人たちは「いのはな」と言っています。香りが良いから、松茸と同じくらいの値段で売られています。1kg 3万円とか。これは去年の秋の香茸ですが、手のひらぐらいに大きいのは、おかしいでしょう？ 事故前は、小さい時に見つけたら、すぐ地元の人がみんな採ってしまいました。事故後は採る人が誰もいないから、大きくなっているのです。しかも、素人の私でも採れる。あの事故のあと3年目ぐらいに、飯舘のおばあちゃんに連れて行ってもらって、いのはな採りに同行させてもらいました。おばあちゃんがカメラマンの私を案内してくれたのです。事故前は1日で10万円とか20万円分のいのはなを背負ってきたそうです。事故後は、採っても食べない。放射能・放射線測定器で測るだけ。どうせ売れない。事故前は隣近所にたくさん配って、逆に自分が今度は白菜をもらったり、大根をもらったりという関係が地域社会として成り立っていたわけですが、そんなことはできなくなりました。

松茸も、大きいのが採れるのに、採らなくなりました。全部刻んで放射能・放射線測定器で測るだけ。測ると、いのはなとか松茸は何千ベクレルなので、食べない方がよいと言うのです。

けれども、福島市から会津に行く途中には、季節の時だけ屋台を出して売っています。南会津産ですが、きのこには産地が書いてないので、本当かどうか分かりません。食べる前に測るしかないのです。測らなければ、何にも分かりません。

昨秋の段階で、青森県でも天然きのこは出荷停止です。岩手県も長野県も一部ダメです。コシアブラは長野県の一部はダメです。山梨県も静岡県も出荷停止です。11年経っても福島は大変ね、という話ではありません。これがいつまで続くのかと言うのですけれども、今残っているのはセシウムです。セシウム137の半減期は30年と言われています。ということは、福島のように、今でも大量に残っているところは、少なくとも、あと200年くらいは食べられません。あと200年汚染が続く、正確に言うと、300年近く汚染が続くにもかかわらず、国は原発再稼働の話であるとか、新しい原発を造ろうとか、それも小型だったら大丈夫だとか言っています。もう忘れてしまったのか、と考えるを得ないのが、今の日本の原発の状況だと思います。一方で、原発やって放射能汚染の実態だと思います。

### 3. 「復興」の風景

#### ①「復興五輪」の風景

復興はどうなっているのか、という話をしたいと思います。もう1年半前になりますか、東京オリンピックがありました。その前から福島も、県知事が率先して福島でもやろうとしていました。聖火リレーだけを福島でやったのではありません。あづま球場というところでは、オリンピックの正式大会として、野球とソフトボールをやりました。「何で？」「復興五輪だから」。ですから、駅にはあと484日とか言って

歓迎ムードはずっと作られていました。オリンピックは更に1年延びたわけですがけれども、福島だからオリンピックと関係ないのではなくて、逆です。オリンピックを使って復興マネーというか、オリンピックの復興モード歓迎ということで、広告代理店にはお金がバンバン行くわけです。今も行っています。風評被害払拭だという話で。実際に2年近く前には、聖火リレーがわざわざJヴィレッジから出発して、福島の各市町村を回りました。



これ（上の写真）がゴールと小学校。ここは川俣町の山木屋地区と言いまして、飯舘村なんかと同じように計画的避難区域になって、2017年まで誰も住んでいなかったところです。ここに人を戻して、「山木屋も計画的避難区域が解除されて人々が戻ってきましたよ。だから、オリンピックのこの聖火リレーで、この再開した学校を使ってゴールにしましょう」「誰が学校に来ているんですか？ 学校をゴールにして誰が学校に通っているんですか？」ということは聞かなければいいのです。聞いてはいけません。子どもたちがいないから、休校と開校を繰り返している。けれども、ここを再開するために16億円から20億円の復興予算を使ってリペアして、ということをやります。

聖火リレー走者が走っているところをワイドで見ると、関係者ではない人たちが3人います。実は関係者でない人は3人だけではないの

です。全部で50～60人はいました。何で50～60人いるの？ 簡単ですよ。圧倒的多くの人が避難している町の中心部から、町が観光バスを用意してここに連れて来たからです。あとは関係者しかいないでしょう？ だから、こういう写真を撮らせたくないのでしょう。オリンピック委員会の出発点となったのはどこ？ これ（下の写真）が出発点となった「とんやの郷」という施設です。



これも復興予算で作ったわけです。もちろん隣の葛尾村（かつらおむら）も復興交流館、これがゴール地点。飯舘村でも復興予算で道の駅が造られ、復興予算で村民交流センターができて、復興予算で復興グラウンドができて、復興体育館、復興子ども園等々ができました。避難解除される時の村の予算は212億円、原発事故前の人口6,000人、事故前のこの村の予算は45億円です。「住んでいる人が5分の1になったら予算が5倍になったのは、おかしくないですか？」と言うと、歩く風評被害と言われるわけです。莫大な復興予算が下りているけれども、村に若い人は戻らないという現実があります。戻った人が年寄りだから、「斎場がほしいよね」。「もしかしたら、作れば子どもたちが来るかもしれない」ということで、子どもの広場もできます。子どもの広場ができたら、やっぱり座るベンチも作らなきゃいけないよね、ということ



で、ベンチ2つで3,000万円。おかしいじゃないかと村議会議員が言ったら、2,000万円になりました。できちゃったら、次はパークゴルフ場ですか！次はやっぱり村道（53km）ですね。村と言いますけれども、広いのです。大阪市と同じ面積です。大阪市は270万人住んでいますが、ここは1,400人しか住んでいません。その村の53kmのアスファルト舗装を全部やり直すのです。大丈夫ですよ、村民の税金じゃなくて、皆さんの税金ですから、というようなことでしょう。この道路は誰が使うの？風景としては、猿がいっぱいいるような道をやり直すわけです。

## ②大熊町の「復興」の風景

大熊町も2019年の4月に新庁舎を建てました。49億円だったかな。建てた時、双葉町と同じで、53人の町民しかいないのに、100人がここで仕事をする。避難後、人が散ってしまっていて、住んでいるところに役場があったわけです。しかし、新庁舎を建てて、今は懐かしい総理大臣（故安倍首相）までが来て、大熊町のお米は美味しいと言っておにぎりを食べる。普通は田植え機でやるものを手で試験栽培したということでしょう。いわゆる農業としての話ではないわけですが、安倍首相は福島に行くたびにおにぎりを食べ続けたわけです。これがPR予算でしょう。これを仕組んでいるのは電通ではないかと私は睨んでいます。

去年の7月に大熊町も避難指示が解除されました。その中心がJR常磐線の大野駅です。今行くと、2年前にあったホテルが消えています。線路と駅舎も全部変わりました。放射線が強いから廃線になっていたわけです。この作業員たちはみんな被曝しながらこの線路工事をやったということです。でも、そういう被曝労働は

全く語られていないということも考えてほしいと思います。今、大野駅に行くと、新開発の場所のように見えます。でも、そこには人々の暮らしがありました。消えたのです。原発があるくらいの町ですから、定期検査で毎年のように何千人もの原発労働者が来るわけです。ですから、旅館もあれば飲み屋もありました。そういう町が封鎖され、今は消えて何もありません。今、皆さんが行っても、全く分らないです。しかし、消えないものがあります。いくら除染したって解体したって、放射線はそういうレベルで降ったわけではないから、残っています。住民がそのまま避難した風景も残っています。しかし、これももう消えるかもしれません。去年の夏ですけれども、コインランドリー（下の写真）には、11年前の避難の様子が残っていました。私はこういうのが残ってほしいなあと思いました。なぜかと言うと、私は震災直後から今は2年に1回ぐらいですけど、宮城や岩手の津波の被災地もずっと回っています。全く違うものです。人が消えたのです。津波の被災地には何もなければ、ここには時間が止まったようなものがあって、これが放射能災害だろうと思います。



## ③双葉町の「復興」の風景

双葉町の住民は30人ですが、町民は17人しかいません。この双葉町の双葉駅には、乗降客がいなくても特急が停まります。JR常磐線の電

車の中で放射線を測っていくと、事故前の 30 倍、50 倍の放射線のところを通過します。高い所を通過して、また低くなっていくというような形ですけど、私は一瞬ですから、一瞬の被曝は大したことないと個人的には思っています。でも、あれを保線するために、労働者があの強烈な電車の中で  $1.7 \mu\text{Sv/h}$  ということは、外は  $3 \mu\text{Sv/h}$  とか  $4 \mu\text{Sv/h}$  です。作業をやった時は、もっと高かったはずですよ。そういう中で JR 常磐線を通すために、下手すると原発構内の作業員よりも、大量に被曝させられるということが続いていたと思います。

去年双葉町駅前に新庁舎がオープンし、儀式を行いました。駅前広場に車がいっぱい停まっていた。この日だけ停まったのですが、発展していく町のように見えました。事故前は、ここに食堂や薬局などがありましたが、全部消えています。

2011 年 3 月 13 日の午前 9 時半頃、常磐線の鉄橋を私が通った時、避難しているはずの人が取り残されていました。そう簡単には避難などできないのです。上空には、病人を運ぶ自衛隊ヘリの最後の 1 機が飛んでいました。この鉄橋が崩れていたわけです。それが今行くと、もう私が見たものが消えてしまったと言うか、なかったことのようにになってしまうから、私が撮ってきたものと同じところを、どうだったのかを残しながら撮っています。

事故前に双葉町は原発を新しく誘致しようとしていました。福島第一原発があるけれども、どんどん予算を削られてから、あと 2 つ造ってほしいということを PR するために、「原子力 郷土の発展豊かな未来」「原子力 明るい未来のエネルギー」という看板を掲げたりしました。でも、豊かな未来もその看板も消えてしまいました。原発を誘致しようとしていたことも、今行

くと、なかったことのように消えてしまっています。町が看板を撤去したのです。なぜ事故が起こったのか、なぜ人々が避難したのか、なぜ今も戻ってこないのか、というようなことが分からないような町になってしまっています。何もなくなってしまいましたが、放射能は残っているのです。これを復興と言うのでしょうか？

そのような中で、伝承館というのが作られていったわけです。私は伝承館を作るよりも、当時の校舎や保育園などをそのまま残しておいてほしかったと思います。個々の問題はいろいろあるのですけれども、時間もあまりないので飛ばします。

#### ④ 浪江町の消えた校舎

浪江町も 4 つの小学校が更地になりました。「これが故郷なのか！ 何で解体するの？」と学校の卒業生が見学会に来て、嘆いていました。この解体費用は私たちの税金です。この時に解体しないと、解体費用や撤去費用は町で出さなければならぬから、解体を選択せざるを得なかったのです。これが、環境省がやっている「早くしろ、早くしろ」という復興ではないでしょうか？

### 4. 「除染」から見える風景

#### ① 「除染実証実験」の始まり



上の写真は 11 年前の風景です。この白い服

は防護服と呼ばれていますが、鳥インフルエンザや豚熱の消毒に使われているのと同じ服です。鳥インフルエンザはウイルス、豚熱もウイルスか細菌です。ウイルスや細菌は、小さくてもモノです。防護服を着ている理由は、このモノが体の中に入らないようにするためです。ガンマ線はモノではなく「線」です。放射線は防護服を通るので、防護服を着ていても、被曝しているのです。

除染実証実験はどんどん始まっています。最初、除染作業員は屋根を洗っていました。屋根を洗ってはダメでしょう。0 屋根に放射線物質が溜まっているから、洗ったら、その水が樋を通して配管に入って下水に行き、川に行き、海に行きます。住民が反対したら、やめました。

## ②「除染」の現場とのぼり旗

土の地面剥ぎは今でも続いています。被曝しながらやるのですけれども、だんだん気にしなくなって、防護服も着なくなります。除染費用は3兆円とか4兆円で、何でもやっています。どうしたらよいか分からないから、屋根は雑巾で拭いたり、ワイヤーブラシでこすったり、石垣の石を雑巾で拭いたりしています。山木屋地区には「負けるな山木屋 明日に向かって除染中」「がんばろう山木屋地区 がんばります除染作業」という旗が立ったりしていますが、避難区域ですから、作業中、人は誰も住んでいません。この旗を見るのは除染作業員なのです。この人たちは、「こんなの何になるの?」と思っているのです。

## ③「除染」の後に

中間貯蔵施設に持って行く前に置いておくところが仮置場です。これが各市町村にあり、飯舘村の場合もここから運びました。これは嘘

です。そんなもので足りるはずはありません。村にあったのは、ほとんどが仮置場です。仮置場から仮置場に行って、中間貯蔵施設に行って、最終処分場に行くという“お話”があります。飯舘村の場合は、仮置場は3箇所、仮置場は100箇所以上ありました。今は仮置場を通さず、中間貯蔵施設に運んでいるということです。それでも、事故前6,000人しか住んでいないこの村に、黒い袋(フレコンバッグ)が220万個以上ありました。仮置場100箇所では足りず、仮置場(下の写真)までであるという漫画のような話が進んでいます。



## ⑤「復興報道」では見えない風景

もう少し除染を詳しく見ましょう。除染で雑巾がけなどをやって綺麗にしたと言うのに、その1年後に解体が始まりました。数千万円かけてやった除染は何だったのでしょうか? それでも除染は続くのです。これを復興と言えるかどうか、皆さんに考えていただければと思います。

考える材料の一つとして、飯舘村に戻ります。2017年3月に避難指示命令は解除されました。その翌年、10年ぶりに大雷神社でお祭りが行われました。村人の30倍くらいの汚染土の入った袋があるはずなのに、ないのです。朝日新聞も毎日新聞も福島民報も、お祭りの写真だけ掲載しています。袋はあるのに、写さないだけなのです。行列が練り歩いたのは汚染土の山の中なのに、大手の新聞を見た人には、もう汚染土

はないという風景に見えたのではないでしょ  
うか？ 私は、私の見た風景が正しいと確信し  
ています。

今日、私が書いた本や作製した DVD をお持ち  
しましたので、お買い求めいただければと思  
います。ありがとうございました。



### 豊田直巳さんのプロフィール

1956年静岡県生まれ。フォトジャーナリスト、ドキュメンタリー映像監督・制作、JVJA（日本ビジュアルジャーナリスト協会）会員。1983年よりパレスチナ・中東の取材を始める。その後、カンボジア・アチェなど東南アジアや、旧ユーゴスラビア・コソボなどの紛争地を取材し、雑誌、新聞、テレビなどで発表。

2011年の東日本大震災以降は、主に原発事故被害の取材を続けている。福島の実況を日本国内だけでなく世界にも伝えるため、写真展『フクシマ～尊厳の記録と記憶』プロジェクトを実施。平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞受賞。子どもたちにも伝わるよう、写真絵本『それでも「ふるさと」』シリーズも発表。第66回産経児童出版文化賞・大賞受賞。

著書は、『福島に生きる凧ちゃんの10年～家や学校や村もいっぱい変わったけれど』（農文協 2021年）他、多数。



### 社会委員会からのお知らせ

- ★当日豊田さんがお持ちくださった著書は、『フォト・ルポルタージュ 福島「復興」に奪われる村』（岩波書店 924円）、『フォト・ルポルタージュ 福島 人なき「復興」の10年』（岩波書店 1,100円）でした。
- ★DVD『奪われた村』を社会委員会で購入いたしましたので、ご興味のある方はお貸しすることもできます。
- ★ご紹介くださった著書は、『福島に生きる凧ちゃんの10年～家や学校や村もいっぱい変わったけれど』（農文協 2,200円）、『土に生かされた暮らしをつなぐ～村に帰った「サマジョール」の夢』（農文協 2,200円）、『「明るい未来」を子どもたちに～原子力に未来を夢みた町に生きて』（農文協 2,200円）、『百年後を生きる子どもたちへ～「帰れないふるさと」の記憶』（農文協 2,200円）です。こちらの農文協の書籍は、写真集です。購入ご希望の方は、ご自身で書店などを介して購入してくださっても良いですし、2月末日までにお申し出くだされば、Aが直接版元に注文することもできます。